故郷にて

信生は嘉禄元年(1225)秋、故郷に帰った。承久元年(1219)秋の頃、故郷を出たのであるから、6年ぶりの帰国である。故郷での最初の歌日記には、こう書いてある。

かくれ持し物の十三年にことしあたり侍よしをこどもなんどの中をきき侍るにも

ということであった。「かくれ侍し物」とは、信生の妻、子供たちの母のことである。子供が、「今年は亡くなった母の13回忌に当たります」と言っているのを聞いたというのである。子供たちが、久し振りに帰った父親の気を少しでも引こうとしての話題であったのであろう。子供たちは、別れた時に8歳と7歳とであったから、今は14歳の女の子と13歳の男の子になっているはずだが、その心根がしのばれていじらしいほどである。なお前に、信生の妻の亡くなったのを、建保元年(1213)としたのは、この記事から逆算してのことであった。

信生にしてみれば、世俗に戻ったわけではないが、世俗に足を踏み入れると、たちまちにしてこうした事柄に巻き込まれてしまう。「自分だけがどうして死んだ人々の数に漏れたのであろうか」と、しんみりした思いになり、

わかれぢに露の命の消やらでとをと三年の秋にあひぬる(44)

別れ路の霜のようにはかないこの命が、まだ消えないで、13年目の秋にめぐりあった

と詠む。14歳の女の子が言ったことであろう。

たださまをかへて、京なんどに侍てみたてまつることにて侍らばや

私も、ただ出家の姿などに、この身を変えて、京などに住み、父上のお世話をして過ごしたいのですがと。信生もさすがにあわれに思われ、

故郷のこの下つゆに又ぬれてむかしにかへる墨染の袖(45)

故郷の木の下露に濡れたように、故郷の子供たちの涙に濡れて、世を捨てた心がまた昔にかえるようだ

と歌を詠まないではおられなかったのであろう。

しかし、信生は、ここにとどまるわけにはいかない。彼は再度、故郷に別れを告げることになる。それが次の文章である。信生歌日記の最後の場面であり、『信生法師集』前半部の終わりである。

このたびをかぎりにて、今はこの世にて、またみることもあるまじきぞかしと思ひ侍にも、さすが心よはくは侍れども、流転三界中のことはりをわするべきにもあらず、さらぬわかれもあるぞ、はてし恩愛のきつくもあらねば、猶心つよきさまにおもひなり侍りぬる

信生は、今度の帰国が最後であって、再びこの世で子供たちに会うことはあるまいと思う。しかし、そう心に言い聞かせはするものの、さすがに心弱くならざるを得ない。しかし、またこうも思う。

流転三界中　　棄恩人無為
恩愛不能断　　真実報恩者（『清信士度人経』）

と。この偈文は、今も出家剃髪法式に唱えられる。信生も出家の際にこれが唱えられたのであろうか。そうであったとすれば、仏教の法式なるものの息の長さに驚嘆させられるものがあるが、それは今ともかくとして、この意味は、

いつまでも三界中を流転していれば、恩愛を断つことはできない。恩愛を棄て仏道に入ることこそ、真実、恩に報いるものである。

ということである。信生は、この耳朶（じだ）に残っている偈文の道理を忘れるべきではないと思う。この世には、避けられない別れというものがあるのだ。すでに出家して、「恩愛の絆（原文中に「きつく」とあるのは「きづな」の誤写か）は断ち切ってしまったはずではないか」と自らに言い聞かせ、心強く生きようと決心するのである。

『信生法師集』は、これで前半を終わり、この後、後半の歌が162首続く。

春の歌22首、

夏の歌5首、

秋の歌22首、

冬の歌15首、

祝いの歌2首、

恋の歌78首（内他人の歌12首）、

雑の歌18首（内他人の歌4首）

である。雑の歌については、すでに見てきたように、故郷を出て上洛し、出家までであって、順序よくきれいに配列されている。信生自身が整理したものと考えられている。歌詠みにとっては、一巻の歌集、いや一首の歌でも、後の世に残るとなれば「以て瞑すべし」とするものがあろう。信生は162首の歌を整理し終わった時に、これがこの世に生きてきた自分の爪痕であると思えて、恐らく解脱に近い歓びを味わったのではなかろうか。

彼はこれを整理し終わってから、関東下向の旅に出たのであろう。それが、今まで述べてきた歌日記、『信生法師集』の前半部である。『信生法師集』は、前半と後半とが、順序が逆になっているわけである。歌人信生は、すでに残すべき歌集は整理し終わっている。そのために、この前半の歌日記は、気負わずに坦々と述べている。それがかえって信生その人を素直に表現することになり、鎌倉武士文学の一典型と言われるものとなったのであろう。（梶村昇）